


# しまなみ海道の活用について

～地域の活性化と持続的発展を目指して～

## 提 言 書

平成 23 年 4 月

しまなみ海道活用委員会  
 愛媛経済同友会

## 1. 架橋の経緯

### (1) 橋は四国の悲願であった

橋は旧来より文化、文明の交流に大きな役割を果たしてきた。より安全、高速、便利な手段として重宝され、架橋によってヒト・モノ・カネの流れは飛躍的に進んだ。

そのため、瀬戸内海をひとまたぎする橋ができれば、四国を発展させる原動力になると四国の人々は熱望してきた。近代が動き始めた明治の時代から、四国と本州の間に橋をかけるという大構想を抱き、その実現を願ってきた。

また、相次ぐ海難事故、その中でも昭和 30 年に起きた宇高航路「紫雲丸」の事故は、修学旅行中の愛媛の学童を含む 168 人もの犠牲者を出す、悲惨なものであった。この教訓が、本四架橋促進に拍車をかけた。「四国の人々の生命を守り、物流・運輸・観光の視点からも本四架橋を実現する」ことは、四国の人々の悲願となっていた。

### (2) しまなみ海道の計画から完成まで

本四架橋の建設は、愛媛・広島でも盛り上がり、国の動きも次第に具体化していった。昭和 45 年には「本州四国連絡橋公団」が発足し、着工に向けた調査が進められた。途中、工事着手間際になってオイルショックの影響で工事が延期されたものの、昭和 50 年 12 月に大三島橋が本四架橋で最初に着工された。

大三島橋は、昭和 54 年に完成し、他の橋も段階的に完成し、ついに平成 11 年 5 月に来島海峡大橋と多々羅大橋の完成によって、今治市と尾道市を結ぶ全長約 60 km のしまなみ海道は完成した。しまなみ海道は、世界初の 3 連吊り橋の来島海峡大橋など、それぞれに個性を持つ全 10 橋から成る。

## 2. しまなみ海道の現状

しまなみ海道は、平成 21 年 5 月に開通 10 周年を迎えた。この間、利用料金が割高という問題点はあったものの、ETC 利用による通行料金の割引が行われるなど、開通当初に比べると利用しやすい環境となった。しまなみ海道は、島民の生活の利便性向上と観光客の増加や物流面の効率化などの地域活性化に貢献するとともに、一定の経済効果を生み出してきた。特に、島しょ部住民にとっては、通勤や通学などの日常移動や、緊急時の移動時間短縮も図れるなど、生活になくてはならない橋となり、完全に定着している。

しまなみ海道は、他の 2 橋（神戸・鳴門ルート、児島・坂出ルート）が高速大量の交通・運輸に主眼を置いているのに対し、「歩いて渡れる、自転車でも渡れる」、人に優しいルートであり、そこが他の 2 橋との大きな違いでもある。歩行者・自転車道があることから、地元住民の利用だけでなく、サイクリングや

ウォーキングに訪れる観光客も多く、イベントが開催されると、全国各地から多くの参加がある。

平成 21 年 3 月には、いわゆる「1,000 円高速」の割引料金が適用され、土・日・祝日の普通車以下の通行料金は、上限が 1,000 円になった。これにより、通行量は大幅に増加、四国を訪れる観光客も大幅に増加した。マイカーで愛媛を訪れる観光客にとっては、大きなメリットがあった。ただ、しまなみ海道は通過点となり、開通時のように島を訪れる観光客が大幅に増えることはなかった。

一方、通行料金の値下げによって、瀬戸内海の多くの航路が廃止された。中には、船会社が解散し、従業員の雇用が失われたケースもある。各航路は、様々な面から重要な役割を果たしていたため、縮小や廃止は、地域にとって大きな痛手となった。

### 3. しまなみ地域の大きい資産

#### (1) 歴史資産

古代から、瀬戸内海は重要な“海の道”(=水路)であった。陸路である南海道と山陽道を結ぶ海路、つまり現在の「しまなみ海道」は、古くは縦の水路でもあった。

中国地方と四国地方の交流は古代より頻繁で、3 世紀の「魏志倭人伝」に登場する卑弥呼の邪馬台国騒乱も、仏教伝来も、この水路が重要な役割を担っていた。また、7 世紀に百済へ援軍を送った額田王が船上で詠んだと言われている、「熟田津の 船乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今はこぎいでな」(万葉集)の舞台も瀬戸内海である。遣唐使や遣隋使が大陸に文化や技術を求めて出て行ったのもこの水路である。さらに、瀬戸内海は藤原純友の乱、平将門の乱、源平合戦など、幾度か戦場にもなっている。

中世以後は海の領主たち(村上水軍、塩飽水軍など)が台頭し、宋や明との交易も活発に行われるなど、世界にも繋がる玄関口となった。

近世には参勤交代の大名船が往来し、幕末には坂本龍馬率いる海援隊もこの水路を航海した。どの時代においても、海人たちの活躍の舞台となったのが瀬戸内海であり、しまなみの海であった。このように、しまなみ地域には、歴史的な交通路として発展してきた優れた歴史的資産が存在する。

#### (2) 文化資産

今治市大三島の大山祇神社の宝物館には、源義経奉納と伝わる「赤糸威鎧大袖付 1 領」など、国宝や重要文化財をはじめ、中世の武具甲冑が収蔵されている。

また、この海域を拠点とし、南北朝時代から戦国時代に活躍した村上水軍（因島村上、能島村上、来島村上）の歴史遺産が収められた今治市大島の村上水軍博物館は、海人たちの往時をしのばせる。毎年 7 月には、大島の宮窪沖で村上水軍が使用していた小早船を復元した水軍レースが開催され、多くの参加者でにぎわっている。また、広島側の尾道市因島には、因島村上氏を知る手がかりとなる因島水軍城もある。

しまなみ海道周辺地域からは、書家の村上三島、画家の平山郁夫といった文化勲章受賞者を輩出し、二人の作品を収めた村上三島記念館、平山郁夫美術館の人気は高い。芸術の島でもあるのだ。

さらに、しまなみ海道は“癒しの道”でもあり、多々羅温泉をはじめとする温浴施設、よしうみバラ公園、因島フラワーセンター、シトラスパーク瀬戸田と枚挙に暇がない。

### （3）自然資産

しまなみ海道は“花海道”とも呼ばれるほど、桜の名所も数多い。耕三寺（尾道市因島）、カレイ山展望台（今治市大島）、多々羅しまなみ公園（今治市大三島）、開山公園（今治市伯方島）、桜並木で有名な積善山（上島町岩城）などが知られている。

特に、亀老山展望台からの眺望は絶景で、ビュースポットとして展望台が整備されている。また、最近では来島海峡の潮流を体験できる観潮船やクルージングも人気を集めており、県外からも多数観光客が訪れている。

### （4）産業資産

しまなみ地域の主要産業は、農業・漁業などの一次産業と造船・海運などの海事産業、製塩業などである。これらを資産とした観光も盛んである。豊富な自然の中で、農業や漁業の体験ができる「しまなみグリーン・ツーリズム」は人気で、ミカン狩りや地引き網体験には、県内外から修学旅行生が訪れている。農家で地元の料理を味わう農家レストランや宿泊もできる農家民泊を始めるところも増えているようだ。修学旅行で訪れた学生は、その後家族でリピーターになっているケースもある。また、今治市周辺の造船所の進水式イベントなどにも、多くの見学客が訪れているほか、塩田で海水を天日乾燥させる天然塩の製造も行われ、「伯方の塩」は全国ブランドの地位を得ている。

## 4. 結びと提言

以上のようなしまなみ海道の現状と、この地域に存在する歴史、文化、自然等の豊富な資産を踏まえ、地域活性化を進めるとした場合、そのキーワードと

なるのは、「ゆったり、ゆっくり」ではないかと考える。

しまなみ海道は、芸予の多島美を満喫しながら島々を回れる「ゆったり、ゆっくり」がモットーの自然回帰型ルートであり、人間性回復ルートでもある。例えるなら、寄り道できる歩行者天国というところだろうか。沿線周辺には美しい自然景観が広がり、海人たちの歴史や伝統、文化が色濃く息づいている。ここは散策やジョギング、釣りやレジャーを堪能できる“遊・悠ゾーン”でもあるのだ。

このような視点に立って、本委員会では、次のような地域活性化策・観光振興策について提案し、提言とする。

### (1) 海と島と橋が調和を図れるような環境を整える

しまなみ海道の役割は、単なる高速道路というだけではない。沿線周辺の豊富な資源や遺産によって、海と島と橋が調和を図り、これからのしまなみを作っていくかなければならない。現在、橋の通行料金の値下げによって航路廃止が相次いでいるが、台風や大雨、地震といった災害等が起こったとき、橋は通行できなくなる。そうした緊急時の輸送手段として、航路は何としても残していかなければならない。また、将来の観光事業を見据えると、やはり船上から眺める橋の美しさ、穏やかな瀬戸内の波に揺られながら多島美や潮流を満喫する楽しさを残していくことが必要となろう。

ア. 橋と航路が共存共栄できるようにしていくことが、もっとも重要な課題であるが、コスト面等により航路の存続が難しいとすれば、この際、思い切って、観光に特化した、島々を巡るクルージングなどの運行を企画検討するなど、何としても船の存続は図るべきである。併せて、それぞれの島内には、乗り合いバスなどの運行により、訪れた人がゆっくりと島内を回れる環境にしていくことも検討すべきである。

イ. また、現在も数多くの人々が訪れているが、こういった人たちのために、いろいろと工夫を凝らした分かりやすい既存航路の路線図、発着場マップや時刻表、観光案内のパンフレットなどを作成することも検討すべきである。

### (2) しまなみの地域資源を活かした多様な観光商品を提供する

観光という言葉は、その土地のすぐれたもの素晴らしいものを客が見て楽しむと同時に、その土地を訪れた人たちに見せる、誇るという意味があるとされている。その意味からすると、しまなみには、観光に活かせる自然、歴史、文化、産業等々、素晴らしい資源が数多く存在しており、これらの資源を活用した多様な観光商品を提供していくことが、しまなみ全

体の活性化につながるものと考える。

いずれにしても、観光振興で最も大切なことは、目先にとらわれることなく、長い年月をかけて、じっくりと取り組んでいくという姿勢である。言うなれば、30年、40年と続けてこそ、世界のしまなみ海道になるということ忘れてはならない。

ア. 体験型観光客向けの周遊コースや観光ツアーの商品組成を行う

これからの観光は、従来のように観光バスを仕立てて名所旧跡を巡る、物見遊山的な観光旅行から、グリーツーリズム、エコツーリズム、ロングステイなどテーマ性の強い、旅先での人や自然とのふれあいなどを中心とした新しいタイプの体験型観光に変わっていくことは明らかであり、そのためには、以下のような取り組みを進めるべきである。

- 片道のみ、近距離のみといった、ニーズに応じたウォーキング・サイクリングコースの設定、また、レンタサイクルの乗り放題チケット発行や乗り捨て場所の拡大などを図る。さらに、JR 四国のサイクルトレインを通年運行し、四国周遊としまなみサイクリングをあわせて楽しめるよう利便性を図る。
- 特に、しまなみのキーワードである「ゆったり、ゆっくり」を求めて、この地を訪れる人は、今後着実に増えて行くはずであり、そのためには、受け入れ体制として農家民泊・漁家民泊など、地域で長期宿泊が可能な施設の掘り起こしを積極的に進めるとともに、これからますます需要が拡大すると予想されるシニア層向けの長期滞在型ツアーを創設する。
- その他、しまなみ海道周辺地域や来島海峡で開催する釣り大会や県外客も参加しやすい島四国巡礼ツアーの創設など、しまなみ地域ならではの観光メニューを加え、PRに努める。
- また、しまなみに残る歴史や伝統を掘り起こし“ものがたり”にしてシニア層のボランティアガイドが語る次のようなツアーを創設することも検討してみてはどうかと考える。
  - ・ 神話、古代史における航路としての瀬戸内海（近畿圏から朝鮮半島、大陸、近畿圏への道）を遊覧し、大山祇神社で木造の神々の物語を学ぶツアー
  - ・ 大山祇神社に安置されている鎧、兜を中心に源平の歴史を学ぶツアー・村上水軍を中心にした、水軍城跡、小早船、潮流体験を組み込んだツアー
  - ・ 造船所を海から巡り、日本の近代産業を支えた造船業の歴史

を学ぶツアー

- ・今治の造船、西条・新居浜の化学・機械、四国中央の製紙等東予地域の産業施設を巡り、日本の基幹産業であるものづくり産業を学ぶツアー

イ. 広島県側との連携を強化するとともに、広域観光ルートを設定する  
観光客は、愛媛だけに来てもらえればよいというものではなく、まずは、自分のところの魅力アップを図って、お客さんを集め、そして、来られたお客をどうして隣のところへ送り出してあげるかということを考えておかなければ、本当の意味での観光は成り立たない。

このため、特に、しまなみ海道で直接つながっている広島県側と連携を強化し、上記のような取り組みについても広島県側と十分協議し、タイアップしながら取り組んでいくことが重要である。

さらに、県内においても、道後温泉などの愛媛県内観光地や、同じ東予地域である新居浜・西条、四国中央などとの連携強化にも積極的に取り組むべきである。

ウ. しまなみ地域の発信力を強化する

素晴らしいものがいくらあっても、このことを全国の人、あるいは世界の人に知ってもらわなくては、意味をなさないということは言うまでもない。このため、例えば、次のような様々な手段を用いて、全国、そして世界へ発信していくことが重要である。

○地元から愛媛県全体へ口コミでしまなみ海道の良さを発信、さらに、口コミやインターネット（ブログやツイッター）によって、全国、さらには世界中にしまなみ海道の良さを発信する。

○飛び抜けた“日本一の●●”を作る。例えば、

- ・日本一の鎧・甲冑などを所蔵する大山祇神社・宝物館の PR
- ・日本一のウォーキングコース、日本一のサイクリングコースの設定、日本一の釣り大会の開催
- ・日本一の多島美、世界一の多島美の PR などが上げられる。

エ. その他

- ・海と島と橋の織り成す景観を活かした観光振興策の検討
- ・航空会社と連携し、空から見えるしまなみ海道のマップ作成や、松山空港着陸前にしまなみ海道上空で機内アナウンスを実施
- ・しまなみ絶景ポイントの PR、写真撮影ポイントの設定やマップの作成などの環境整備
- ・ガイドと写真撮影ポイントを周遊するツアーの創設など、景観を活かした地域活性化策や観光振興を強化することも考えられる。

なお、これらの提言は、大変盛りだくさんであり、ある面、焦点が定まらなかったという点はあるものの、一つの方向性は出せたのではないかと考えている。言うまでもなく、これらの提言を実現していくためには、関係機関が緊密に連携し、最初からあきらめずに、長い時間をかけて、じっくりと粘り強く取り組んでいくことが何よりも重要である。

本委員会の提言の中の一つでも具体化できればと願っているが、いずれにしても、しまなみ地域の活性化に向けた一つの足がかりになれば幸いである。